

英語教師の専門的知識に関する研究

最終更新日：2017年5月8日

【プロジェクト代表者】
英語教育講座
教授
宮迫 靖静

キーワード

教員養成, 専門知識, 英語教師

プロジェクトの内容 (目的・方法・結果と意義)

目的

英語教師の専門的知識に関する研究の前段階として英語学習における準計画的練習を吟味することであった。

方法

英語の達人の学習法分析には、学習方略の視点から達人の英語学習法をインタビューした資料(竹内, 2003)を使用した。尚、英語の達人(前掲書, p. 110)とは、次の項目に該当する特異な学習者ではない高英語能力者である: (a)日本で生まれ、(b)12才以降に英語学習を開始し、(c)基本的に国内で英語を学習し、(d)日常的に英語を使用する家庭環境になく、(e)職業で英語を使用する(教員12, 通訳者3, 会社員, 外交官1, 計18)。

結果

- (a)英語の達人の英語学習においては、準計画的練習が相当な割合で行われている可能性がある。
- (b)英語の達人の英語学習においては、目的活動に直接係る下位部門スキル練習が大部分を占める。
- (c)英語の達人の英語学習法においては、SLA研究の知見に沿うものが見られる。

意義

これまで、英語学習に関して、専門知識及び卓越したパフォーマンス研究の視点からメスが入れられたことはなく、英語学習に計画的練習が無縁ではないことが示されたのは、成果である。また、英語教育は、達人ではない一般の学習者を対象とするものだが、知見(b), (c)は、一般の学習者にも該当する内容である。さらに、計画的練習は学習者の自律(autonomy)を求め、メタ認知に長けた学習者でなければ実施が難しいが、計画的練習の原則に基づく準計画的練習は、Fcs, Fb, Fxの3Fsが揃うことが必要条件なので、一般の学習者に対する授業の中で比較的簡単に指導に使える。

成果の応用可能性 (私たちの活動の成果は、このような分野にこのように貢献することができます。)

例えば、クリッカーを使用するアクティブ・ラーニング(AL)である(Ericsson & Pool, 2016)。教師の説明に続いて、学習者にクイズをだし、グループで考えさせ(Fcs)、解答を示し(Fb)、正しく認識させる(Fx)。このALを内容科目でなく、英語による英語授業で行えば、計画的学習の原則に沿った英語による英語授業になる。

英語の達人のような個人学習において、準計画的練習を活用して英語能力の向上を図るのは、やはり、自律的学習者でなければ難しいかもしれない。しかし、計画的学習の原則を活用する英語指導におけるALは、課題解決型学習(Problem-based Learning)・協同学習(Collaborative Learning)の側面を有し、学習者のメタ認知育成・自律にも寄与するはずであり、やがては、個人学習における準計画的練習に繋がる可能性がある。

準計画的練習の英語授業での使用例を示したが、この他にも、英語教育に応用できる可能性があるのではないか。専門知識及び卓越したパフォーマンス研究の視点からも、英語教育に関する研究を続けていくべきであろう。

このプロジェクトの形成に寄与した制度等

平成28年度 福岡教育大学研究推進支援プロジェクト経費

プロジェクト構成員 (所属・職名・氏名・役割分担)

英語教育講座・教授・宮迫靖静